

赤井戸系土器

赤井戸式土器については、今までに太田市や桐生市、栃木県足利市周辺、さらには沼田市方面でも確認されているが、その中心は赤城山南麓地域である。

この地域の標高100mから180mの間、すなわち丘陵性台地からなる柏川、新里村、扇状地を含む低台地からなる笠懸村、赤堀町、そして前橋市荒砥地区に該期の遺跡のほとんどが分布している。ちなみに柏川村の堤頭遺跡（赤井戸式期住居址12軒）は標高158mの赤城山原形面（残丘）の南端部に、また新里村の峯岸山遺跡（同8軒）は標高159mで、赤城山麓中腹より続く比較的幅の広い赤城山原形面上に立地している。

本遺跡も赤城南麓下標高157mの丘陵に立地する等の条件から、赤井戸式期の住居址の存在が十分予想された。事実、周東隆一氏は1948（昭和23）年以来、北関東西半部の主として赤城山南麓地域における後期弥生式の研究の中で熊の穴遺跡を調査し、その土器分類成果を1967（昭和42）年に発表している。（1967, 考古学ジャーナル）

赤井戸式土器は、壺、甕、甌、高杯、小形器台、椀、手捏ね土器の7つの器種に分けられる。文様では縄文を施したものと、縄文は欠落しているが輪積み痕があるものなどに特徴を見出せる。

今回、熊の穴遺跡の土器を調査してまず気がつくのは、輪積み痕を残す口縁が多いことである。さらには縄文が見当たらないこと、そして刷毛目が目立つという特徴がある。

さて、周東氏の熊の穴遺跡出土の土器分類成果に従い、氏の調査と今回の調査をまとめると次のようであった。

A. 第1類

輪積み痕を口縁に残し、縄文を口縁と胴部に押捺したものを第1類とする。氏の調査結果では、莫大な出土土器中わずか1個体分をみただけとのことだが、今回も少数出土したのみであった。

B. 第2類

口縁に輪積み痕を残し、土器の装飾とした無文土器の総称。氏の調査では輪積み痕が1段から3段までの種別がある。今回の調査でも氏の調査時と同様、一番多く出土しているのがこの類である。その多くが胴部下半分を欠いているので、器種については判断に苦しむが口縁部を中心に判断すると1～4段までが確認された。その大半は3段のものであるが、4段も6片ほど検出されている。この輪積み痕は調整がなされ、断面は起伏に乏しくほぼ線状になる。さらに頸部では無文もあるが、刷毛目もみられる。これは一次調整により本来頸部から胴部にかけて刷毛目が施されていたものであろうが、体部はその後けずり落としたみがきにより二次調整されていったのかもしれない。また口縁内部もなで調整が主だが、明らかに刷毛目がみられるものも多い。これを遺構別にみると、各段の輪積み痕口縁が単独に出土することなく、いずれかの段を併せて出土している。

V 成果と問題点

C. 第3類

複合口縁の類である。今回の調査では1類土器と同一遺構出土の例がほとんどであった。

D. 第4類

櫛描波状文を有するもので、樽式の一種であろう。今回4片が出土しているが、いずれも口縁部や胴部の一部のみであるため判断が難しい。周東氏同様簾状文のある土器は検出できなかった。波文も乱雑で、樽式の典型をなす波状文に比べ、波文の線の間隔が平行にみえる。

E. 第5類

S字状口縁をもつ土器群である。今回はS字状口縁のほか、石田川式土器の特徴の1つである刷毛目をもつ土器もこの類としたい。S字状口縁はS字自体が崩れ気味でしかも外に開く様相を呈している。また頸部には横線もないことから石田川式土器の系譜をひくにしても、時代的には隆盛時を過ぎたものと思われる。今回もS字状の類型に入る口縁をもつ鉢形土器が1個体出土している。

すでに述べてきたように本遺跡では甕、壺、片口、椀、高杯、甌、器台などが出土している。

小島純一氏の赤井戸式研究の当該土器の編年は3期にわかれ、その第3期はS字状口縁及び小形器台が共伴する。これに従っていければH-8号住居址出土のS字状口縁や器台等から、本遺跡はⅢ期以降、すなわち古墳時代前期中葉以降に存在していたと考えられる。ちなみに住居址等はAs-C混じりの黒土に覆われていた。この点から他遺跡をみると、今年度発掘調査が行われた内堀遺跡群がAs-C降下後の古墳時代前期ということではほぼ時を同じくする。

内堀遺跡群Ⅲの出土土器は器台、壺、甕、高杯、甌、片口等がある。しかし、体部に縄目をもつものが多く、さらに口縁部に波状文がつく土器も数多い。S字や折り返し口縁が少ないので本遺跡に類似しているが、輪積み痕を残す口縁部は極端に少ないということである。つまり赤井戸系と樽系、ひいては石田川系の影響を受けているものの、その割合から言えば依然在地色が強く残っていると言える。

しかるに本遺跡では、刷毛目を使った台付甕、あるいはS字状口縁などから石田川式にみられる外来系の影響と輪積み口縁などから赤井戸を主とし、折り返し口縁をもつ片口などから樽などの在地系の影響が混然一体となっている様相を呈す。

赤井戸式土器体部に見られる縄文が消えていく動向を新しいとすれば、本遺跡は内堀遺跡群より新しい時期といえる。しかし、文化もしくは土器の技法の伝播の速さや、在地民の生活の強さからみると時期を一概に決めることはできない。

荒砥地区を中心に赤井戸式土器の流れをくむ土器の出土をみると、富田遺跡群のH-50号住居址出土の壺（巻きあげ痕、部分的に刷毛目が残る）がある。これは樽式土器の甕（口縁部横ナデ、波状文は口唇部、口縁部及び胴部に施文。折り返し口縁）を共伴しており、As-C降下直前の住居である。また、諏訪西遺跡H-5号住居址では、埴型土器が3個と手捏ね土器が出土しているが、その輪積み痕は10段以上残るものもあり、刷毛文も認められている。これは4世紀終末の住

居とみられている。

このように本地区においては、本遺跡と時期を相前後とした遺跡が数多くみられる。そこで本遺跡の出土器種から特色を述べてみる。

すでに述べたように本遺跡の出土遺物は器台やミニチュア土器等、いわゆる祭祀性のものが多い。特にM-1号墳墳丘下においては顕著で、器台や埴がそろって出土している。しかも大高坏等には坏部の稜線や深さ、畿内の欠山型の器台の台部は底部が大きく広がる様相から畿内東海系の影響がみられる。以上の点からさらに多数の土器群が二次焼成痕を残したことからすると墳丘下は祭祀とは関係なかったのか。ちなみに近くのI-1号井戸でもミニチュア埴、小甕など祭祀に關係あるとみられる遺物が出土している。本地域は台地縁辺のためかこの古墳時代前期以降の住居以後生活の跡はみられない。ただ古墳の出現を待つのみである。

従って集落の研究としては、来年度以降実施される西隣の斜面の調査が待たれるところである。きっともっと大きな住居がでてくるにちがいない。

古墳時代の一時期に出現し、忽然と去っていった住民は一体どこに行ったのであろう。

赤城山は彼らに何をつぶやいたのであろうか。ただ風のみぞ知るところであろうか。

結 語

今回の目的は、55haもの規模を持つ通称プラスランド建設予定地を縦横断する幹線道路予定地の文化財発掘調査にあった。

本地は「上毛古墳綜覧」や周東隆一氏の「北関東の後期弥生式土器」の研究に見られるように、古墳をはじめとする数々の遺構、遺物が眠っている、いわば文化財にとって貴重な地であるといえる。時代別に見ても縄文～平安と長い時間にわたる存在が確認されたことで、古代の人々にとって生活しやすいところだったようみえる。

今後予定される発掘地は次第に台地中央へと進んでいくことから、今回の研究は横儀研究の嚆矢ともいえるのでできれば現状のまま永く保存していくことが望ましい。残念ながら今回の遺構の現状保存は不可能であった。しかし、今後の研究についてはできる限り保存を心がけて頂くよう切に望むものである。

参 考 文 献

- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1985 『柳久保遺跡群Ⅰ』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988 『柳久保遺跡群Ⅴ』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 1988 『柳久保遺跡群Ⅶ』
- 前橋市教育委員会 1988 『柳久保遺跡群の発掘調査Ⅲ』
- 群馬県教育委員会 1984 『昭和58年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報』
- 群馬県教育委員会 1985 『昭和59年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報』
- 群馬県教育委員会 1985 『堤東遺跡』
- 群馬県 1988 『群馬県史 資料編1 原始古代1 旧石器・縄文』 群馬県史編さん室
- 大胡町教育委員会 1986 『上大屋・樋越地区遺跡群』
- 柏川村教育委員会 1985 『柏川村の遺跡』
- 柏川村教育委員会 1985 『西原古墳群 K5』